

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 付 晨晨

中国の百科事典ともいべき類書の起源は三世紀に遡り、六世紀にいたって典型を生み、七世紀以降多様に発展し、十一世紀に目録学上の一ジャンルとして独立する。ただし、六世紀以前の類書はすべて散佚し、断片的なかたちでしか残っていない。本論文は現存史料の精密な分析によって六世紀の代表的な類書の形式を復元してその性格を明らかにし、この時代に典型的な類書が現れてくる歴史的な背景を考察したものである。

第一章は、漢代には教学の場であった官学が、魏晋以降衰え、南朝ではもっぱら皇太子と貴族の子弟を結びつける儀礼の場としてしか機能しなかったこと、第二章は、これに対して南朝の皇帝は、声望の高い人物を招いて学館を建て、下級士族を取り込んで活況をもたらし、貴族も好んで参加していくようになること、学館は当初館主に依存した臨時的な機関であったが、梁代には常設化していくことを明らかにした。

第三章は、目録学の方法を用いて、斉梁時代に類書と呼べる性格をもった独立した書籍群が出現したことを明らかにした。そのうえで、これらの書籍群がいずれも曹魏の『皇覧』を祖型としながら、『皇覧』が漢代までの儒教知識を体系化したものであったのに対して、これらの書籍群は魏晋以降に出現した大量の史書や地理書を取り込んで体系化したという点で隔絶した性格をもつものであったこと、さらにこれらの書籍群の出現が、この時代に進行した史学の独立と発展に対応したもので、史学の発展に寄与した下級士族と皇帝との政治的な接近が背景にあったことを論じた。第四章は、唐の『藝文類聚』等の条文配列に綿密な分析を加えることで、のちの類書の祖型となった梁の『華林遍略』の条文配列の方式を明らかにしたもので、各項目内の条文は「字・経+その他」の順序で配列され、「その他」の条文は時代順に配列されたことを明らかにした。第五章は、北齊の『修文殿御覧』が、『華林遍略』を手本としながら、条文配列を経史子集の順に改めた背景について論じ、そこには王朝の正統性を確保しながら、南朝と北朝で蓄積された知識を総合して体系化するねらいがあったことを明らかにした。第六章は、北宋の『崇文総目』と『新唐書』藝文志に類書として著録された書籍の比較検討を通じて、唐宋期における類書概念の変化を明らかにした。終章では、以上の考察にもとづいて、萌芽期から完成期に至る類書の形成史を概観し、今後の研究の展望を示した。

本論文はもっぱら類書の編纂面の研究であり、類書の利用面における検討になお不足があるという課題はあるが、類書の成立過程を明らかにして初期類書概念を打ち立てたという点で、本論文は中国文化史の研究に大きな貢献をなすものであり、学位論文として十分に合格に値すると判断する。